

資料

フィンランドにおける多様な発達困難を有する若者支援の動向 —「ユースセンター」の訪問調査から—

内藤 千尋・田部 絢子・石川 衣紀・石井 智也・池田 敦子・
柴田 真緒・能田 昂・田中 裕己・高橋 智

Trends in Support for Youth with Diverse Developmental Difficulties in Finland:
From an On-Site Survey of the Youth Support Center

NAITOH Chihiro, TABE Ayako, ISHIKAWA Izumi, ISHII Tomoya,
IKEDA Atsuko, SHIBATA Mao, NOHDA Subaru, TANAKA Yuhki
and TAKAHASHI Satoru

要 旨

本稿では、筆者ら「北欧福祉国家における子ども・若者の特別ケア」研究チーム(代表：高橋智日本大学教授・東京学芸大学名誉教授)が調査したフィンランドのユースセンター「ハルユースセンター(Harjun Nuorisotalo)」「ヌメラユースセンター(Nummelan nuorisokeskus)」(2019年9月)および「ヴァモス・エスポー(Vamos Espoo)」の取り組みの紹介を通して、多様な発達困難を有する若者支援のあり方を検討した。若者向けの発達支援の一つであるユースセンターの特徴は、若者の支援ニーズに丁寧寄り添う専門家やピアの存在により、ユースセンターが若者の居場所や安心できる環境となっていることである。日本の若者支援においても事後対応的支援ではなく、地域での早期・予防的支援としての居場所づくりや支援内容の検討が課題である。

キーワード

北欧福祉国家 フィンランド 若者支援 ユースセンター 発達困難

目 次

- I. はじめに
- II. ユースセンター「ハルユースセンター」「ヌメラユースセンター」の取り組み
- III. ユースセンター「ヴァモス・エスポー(Vamos Espoo)」の取り組み
- IV. おわりに

文献

I. はじめに

1990年代以降の経済低迷の長期化と社会変化の中で、若者は貧困、教育機会・労働市場・社会保障からの排除、家族形成の困難、地域間の分断など、厳しい状況に置かれている(日本学術会議：2017)¹⁾。とくに多様な発達上の課題・困難を有する若者に対しては、個々の支援ニーズに応じた長期的で丁寧な支援が必要である。

日本における若者支援として、例えば、「地域若者サポートステーション」による若者の社会的自立・就労支援のほか、ニート・ひきこもりなど若者の自立をめぐる問題の深刻化を受けての「子ども・若者育成支援推進法」の施行(2010年)などの支援体制が徐々に整えられつつあるが、若者支援の拡充は喫緊の課題である。

筆者ら「北欧福祉国家における子ども・若者の特別ケア」研究チーム(代表：高橋智日本大学教授・東京学芸大学名誉教授)はこれまで、多様な発達困難を有する子ども・若者の発達支援・特別ケアのあり方について、北欧福祉国家(スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド)の取り組みを事例に調査・検討を行ってきた。北欧においても多様な「育ちの発達の困難」(失業、低所得・貧困、ホームレス、早期結婚・離婚、不適応・孤立・引きこもり、アルコール・薬物依存、精神神経疾患、いじめ・虐待・暴力、非行・触法・犯罪等)を抱える若者が増加して、彼らの発達支援が大きな課題であることは日本とも共通している。

本稿では、2018年3月に訪問調査したフィンランドのユースセンター「ヴァモス・エスポー(Vamos Espoo)」(首都ヘルシンキ近郊のエスポー市)、2019年9月に訪問調査したフィンランドのユースセンター、「ハルユースセンター(Harjun Nuorisotalo)」 「ヌメラユースセンター(Nummelan nuorisokeskus)」(首都ヘルシンキ市)の取り組み紹介を通して、フィンランドおよび日本における多様な困難を有する子ども・若者支援のあり方を検討することを目的としている。

なお、3ヶ所のユースセンターの利用者・職員等の調査協力者に対して事前に文書にて「調査目的、調査結果の利用・発表方法、秘密保持と目的外使用禁止」について説明し、承認を得ている。また、本

稿の「ヴァモス・エスポー(Vamos Espoo)」についての記述部分は、高橋智・田部絢子・内藤千尋・石川衣紀(2018)「若者支援センター」の取り組み—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向²⁾—、『内外教育』第6692号²⁾を加筆・修正したものである。

II. ユースセンター「ハルユースセンター」「ヌメラユースセンター」の取り組み

ヘルシンキ市における若者支援として「保健医療支援、対人関係支援、心と健康に関する支援(薬物乱用・依存症等)、居住支援、経済的支援」等が行われている。ユースセンターはそれらの支援の一環として開設されている。2019年時点でユースセンターはヘルシンキ市内に約60ヶ所設置されている³⁾。

ハルユースセンター(写真1)は、1980年代に音楽活動に興味を持っていた若者グループ(「ヴァサンカツギヤング」)の要望により、ヘルシンキ市で火葬場・遺体安置所として使われていた施設が改装され、1986年にユースセンター「Harju Music House」が開設された^{4), 5)}。センターの管轄はヘルシンキ青年委員会であり、管理は自治体に任されている。運営するスタッフ6名(自治体職員として雇用)は、活動内容(音楽活動・陶芸等)に関する専門性を有する者で構成されている。

利用対象は「若者」とされており、利用料は無料である(一部の施設利用は若者に限定されておらず、広く地域に開放されている)。開室は平日(月～金)の14時～21時で、一日の利用者平均は100～150名で



写真1 ハルユースセンターの外観

ある。利用に際しては飲酒・薬物の使用禁止等の一般的な利用ルールが定められているが、そのほか「相手を大事にする」ことが利用者には求められる。

当ユースセンターでは、若者が自由に集える環境設定が目的とされ、若者の興味関心に合った活動ができるようにスタジオや制作室が設けられている(写真2~4)。バンド・音楽活動、絵画、陶芸、フリースペースがあり、不定期で若者対象の特別プログラムも開催されている。



写真2 制作エリア1



写真3 制作エリア2



写真4 音楽スペース

利用する若者のなかには学校・職場・家庭等において居場所がない者も少なくない。そのため、スタッフは「どの若者にも居場所となるように」と彼らを受け止め、実際、スタッフは若者から友人・家族関係や仕事の悩み等を相談されることが多い。当ユースセンターは「若者が安心できる対応」「集いやすい居場所」として口コミで広がり、多くの若者利用につながっている。

設立から30年が経過するヌメラユースセンター(写真5)は、平日に若者対象のオープンスペースとして開所している(写真6~8)。利用対象は7学年(日本の中学校1年)から17歳までであり、一部小学生の利用もある。一日の利用者は30名程度、利用に際しては飲酒・薬物の使用禁止がルールであるが、基本的には若者が自主的に活動・提案できることを重視している。日中の時間帯には若者に限定せず、広く地域のコミュニティスペースとしての利用貸し出しも行っている。

市の職員として登録されたスタッフが10名、そのうち3名はパトロール隊としての役割も担っている。



写真5 ヌメラユースセンターの外観



写真6 フリースペースの様子

若者が多く利用する夜の時間帯は、スタッフが3名配置されている。ユースセンターの予算は年間60万€であり、活動費・人件費に充てられている。

利用する若者は多様な発達困難・支援ニーズを有しており、障害を有する若者も参加している。障害を有する若者に特化したプログラムは用意されていないが、必要に応じて障害を有する若者が在籍する学校と連携を図ることもある。

若者の多くは悩みを抱えており、精神的落ち込み・うつ、将来に対する不安、アルコール・薬物問題等、家族や学校では打ち明けにくい内容をスタッフに相談することも少なくない。適宜、専門家へと繋ぐこともある。

ユースセンター内の活動のほか、地域の学校を訪問巡回して若者支援に関する啓蒙活動やユースセンターの広報、若者の声・意見を自治体に届けることもユースセンターの役割とされている。そのほか、保護者とのコンタクトも大切にしている。



写真7 ホールの様子



写真8 ゲームスペースの様子

Ⅲ. ユースセンター「ヴァモス・エスポー (Vamos Espoo)」の取り組み

フィンランドにおける若者支援として2008年から実施されているサービスモデルが「ヴァモス (Vamos)」である⁶⁾。ヴァモスは社会保健サービスを提供する非営利団体「ヘルシンキ・ディーコネス研究所」が開始し、サービスの運営資金は同研究所のほかヘルシンキ市、欧州社会基金、フィンランド教育省などが提供している。2018年現在、ヴァモスは国内7市に設置され、各市がヴァモスのサービスを買って自治体サービスとして利用者へ無料提供している。提供されるサービスの種類は各市のヴァモス事業所によって異なる。

ヴァモスの活動目的は、教育からの排除、自己認識や自尊感情の低下、身体的困難・障害、いじめ・虐待、孤立、精神的不安定、アルコール・薬物依存、日常生活のコントロールと遂行の困難、家庭的困難、経済的困難、ホームレスなど、若者が抱える多様な困難・ニーズに応じた支援の提供である。ヴァモス全体で年間約2,000名以上の若者が利用しており、そのうち約65%は1年以内に次の進路へ移行していることが報告され、その費用対効果の高さも注目されている。

筆者らが調査訪問したヴァモス・エスポー(写真9~11)は2013年に開所したが、その活動は、①「行政等による手厚い運営支援」、②「コーチングを中心とした若者との丁寧な対話」、③「共通した課題・困難を有する若者同士のピア・サポート」の3点が特徴として挙げられる。働く場所や学ぶ場所につながっていない若者(16歳~29歳)を対象とし、年間約300人が利用している。

運営は前述のヘルシンキ・ディーコネス研究所が行うが、予算はエスポー市が利用者1人につき5万ユーロ(日本円で概ね650万円程度)を負担しているため、利用者は無料で利用できる。アルコール・薬物等の依存症の場合は専門機関の治療が必要となるため、当センターでは日常生活には大きな課題がないことが利用の条件となっている。

ヴァモス・エスポーが提供するサービスは大きく5つあり、①「個人トレーニング」、②「グループ・トレー

ニング」、③「キャリアサービス」、④「マインドセット」、⑤「ロマ族支援プロジェクト」である。この他にも、社会保険サービス、学習・労働サービス、スポーツ・余暇サービス、住居サービス等が、個々のニーズに応じながら提供されている。

- ①「個人トレーニング」は、十分な教育を受けられてこなかった人を主たる支援対象としている。
- ②「グループ・トレーニング」では日常生活の管理、社会的スキルの習得、自尊感情と実行力の強化に



写真9 ヴァモス・エスポーのある建物外観



写真10 ヴァモス・エスポーのラウンジの様子

支援が必要な若者を対象に、職場や学びの場を見つけるための集中的な訓練が用意されている。より個別的な移行支援が必要な場合は「キャリアサービス」が提供されている。

- ③「キャリアサービス」は個別支援の一環として提供されている。就職や進学に関わる支援では願書作成や面接練習などの受験準備にかかる支援、企業との提携による就労支援、心理士等の外部専門家との連携を行う。利用者本人の状態・状況に応じて、本人の許可を得た上で医療機関につなげるケースもあり、将来への希望や方向づけと合わせて関係機関への移行などの具体的な支援が図られている。
- ④「マインドセット」は、精神的疾患やアルコール・薬物依存によって心理社会的な適応困難や著しい機能低下の状態にある若者を対象としたサービスである。
- ⑤「ロマ族支援プロジェクト」は少数民族ロマ族の若者支援を目的として設定され、個人支援とグループ活動によって社会参加や技能習得を目指していく。写真12は、学校中退や刑務所収監に陥りやすいロマ族の男性の若者に適した教育支援のコンセプトを開発するために討議している場面である。これらのサービスは北欧の若者支援の基本とされる「youth guarantee」(20歳までの全ての若者に対する後期中等教育で学ぶ権利の保障)に位置づくものであり、エスポー市のソーシャルワーク、医療関



写真11 インタビューの様子(ウェブサイトより)⁷⁾

係機関(精神医学、薬物乱用防止サービス等)、職業安定所(青少年の就労支援)等の関係機関との連携・協働で実施されている。利用者の中には医療機関から紹介されてきた者も多い。

「個人トレーニング」と「グループ・トレーニング」では、主に利用者との対話を重視した「コーチング(相手の潜在能力を引き出し自発的な行動を促すための手段)」による支援を行っている。利用者が「必ず何かを達成すること」を目標とし、一方的な指導・支援ではなく、スタッフと利用者が共に課題を考えていくことを大切にする。

ヴァモス・エスポーには社会福祉士や作業療法士、教育学や社会学を専門的に学んだスタッフが所属している。コーチング・スタッフの一人であるアトリ氏の前職は音楽教師であり、ヴァモス・エスポーでは音楽活動を活かしたコーチングを実施している。現在は大学院博士課程にも在籍し、「若者の声を支援サービスに生かす方法」に関する研究を進めている。

ヴァモスにおけるコーチングでは、「利用者のニーズ把握」「利用者の得手不得手の把握」「実現可能な目的・目標の設定」「自己肯定感の向上」「具体的な支援手立ての実行」を支援の基本的観点として、利用者本人が目標を定め、その目標に向かって進んでいくプロセスが重視される。学校現場だけでは対応が難しいケースが有する多様な個別ニーズに応じて、支援を組み立てる点がヴァモスの特徴である。

「グループ・トレーニング」では、①基礎準備期間コース(週2回)、②就労・就学準備コース(週2~4回)、③半年以内に就労・就学を目指すコース(週4回)の3段階が設定され、利用者の状態に応じて移行し



写真12 ロマ族支援プロジェクト(ウェブサイトより)⁶⁾

ていく。コーチングを通して利用者の自己理解や社会的自覚を促すことを目標とし、自己理解・自己確立、自主的な活動、基本的生活習慣(生活習慣、生活リズム、睡眠、食事、金銭管理等)での課題について、本人の話を丁寧に聞きながら支援を行っていた。

訪問調査の当日、筆者らはコーチングを活かしたワークショップに利用者・スタッフと共に参加した(写真13)。将来の自分の姿をイメージする活動として、①これまでの職歴(または10年後に就いている仕事)、②その仕事をするうえで必要な能力、③その仕事においてベストな出来事、④その仕事を実現するために必要と思われる研修、⑤今の時点でできていること、⑥どのような同僚がいるか、⑦その仕事は自分で目指した職業かについて考える作業が行われた。

参加者の意見はグループにおいて発表され、共有される。利用者からは「配送・仕分けの仕事仲間としたい。そのために現場で必要な力を磨いていきたい。まじめにやれば環境は良くなっていくと思う」(Aさん)、「10年後は音楽教師か学習指導員、あるいはコックになりたい。10年の間に必要な能力を養いたい。仕事をする上でベストと感じるのは、何かの役に立っていると感じられること。研修は常に必要であり、自信を持つことで環境は改善していける。フレキシブルに同僚と接したい。専門家として環境にとけ込んでいきたい」(Bさん)など、将来への希望や今の自分自身に必要なことについて積極的に語られた。

この活動は「自己理解・自己確立」を促し、自身の強みや課題を知り、互いの価値観を丁寧に確認しあい、今後の人生で希望する方向・進路に進んでい



写真13 ワークショップの様子

ける可能性を知る(自身の可能性を引き出させる)ために有効な方法と考えられていた。

利用者たちはヴァモスでの支援について「ここへはとても来やすい」「これまで挫折を繰り返す人生だったが、ここでは自分の意見を聞いてもらえる」「グループで助け合うことがいい」とその魅力を熱心に語っていた。

利用者の成長と発達にはピアによる活動が大きな影響を与えている。彼らは互いのサポートを目標に、買い物や食事・調理等のグループ活動を行っている。訪問当日も数名の利用者がヴァモスを訪れており、互いにリラックスした雰囲気の中で時間をともにしている様子がうかがえた。

高校卒業後に進路を模索し、ヴァモスに3年間通っているCさんは「コーチングを受けることで日常生活のルーティンが整理され、今後のことを考えられる」と語り、ピアによる活動に対しては「皆で一緒にいることが家族のようで過ごしやすい。自分にとってメンバーとコンタクトを取りながら将来のことを考えられる環境が良い」と話す。

学校をドロップアウトして長い間自宅で過ごしていたDさんは「仲間がいて参加しやすい雰囲気・環境」であることを大切に考えており、Eさんも「ここではグループでいろいろな経験を積むことができ、職員が丁寧に話を聴いてくれることで、今後の方向・進路を考えていける」と語った(写真14)。

職員やピアによる伴走的発達支援を通して、利用者は自己を理解し、安定した日常生活を送るための具体的手段を着実に獲得していく過程で、次第に自信を取り戻し、将来に対する希望や夢についても多



写真14 ワークショップに参加の利用者・スタッフのみなさんと

く語られた。このように、多様な発達上の課題・困難と支援ニーズを有する若者の自立・移行や社会参加を保障していくためには、信頼できる大人や仲間との丁寧な対話をベースにした発達支援が不可欠である。

ヴァモス・エスポーでは利用者である若者へのアンケートを定期的実施している。アンケートは健康、日常生活、対人関係、就労・進学、アルコール・薬物、家庭、アイデンティティ、信頼と希望等の項目について10段階で自己評価を行うものであり、以前の状況との比較や今後の目標を本人と確認するために実施される。一定期間の自身の変化・成長を視覚的に捉えることは利用者本人の安心や自信に繋がり、取り組むべき課題が明確になる。

ヴァモス・エスポーでは、2017年の利用者約300名のうち約54%が、就職や進学など次の進路につながっている。利用期間には個人差があり、3年以上利用して時間をかけながら次の進路へ移行していくケースもある。アフターケアとして利用終了後の3ヶ月間は電話連絡等による継続支援が行われ、必要があれば再度ヴァモスの利用が可能である。

ヴァモス・エスポーのスタッフは「サービスを必要としている人が、ヴァモスにたどり着けたことそのものが成果の一つ」と話した。しかし、これはサービス申請にかかる複雑な手続きがヴァモス等の支援に繋がる際の障壁となってしまっていることも意味しており、よりスムーズなサービス提供体制の構築が当面する課題となっている。

IV. おわりに

本稿では、フィンランドのユースセンター「ハルユユースセンター」「ヌメラユースセンター」および「ヴァモス・エスポー」の取り組みの紹介を通して、多様な発達困難を有する若者支援のあり方を検討した。

フィンランドにおいても、各種の要因により不安・緊張・抑うつ・ストレス等を抱え、信頼できる大人や仲間と出会う機会が奪われている若者が少なくないが、彼らにとって若者向けの発達支援や移行支援サービスが各自治体によって広く実施されていることは、ドロップアウトや社会的排除の予防策としても重要である。

若者向けの発達支援の一つであるユースセンターでは、若者の興味関心に即した活動内容を展開することで若者が参加しやすい環境を設定していることや、日常の居場所の一つとしていることが特徴である。また、ユースセンター職員の役割は大きく、地域の先輩として若者の相談を丁寧に聴き、支援にかなげている意義は大きい。地域に居場所があることや悩み・不安を気軽に聴いてもらえる場所が、若者にとっての「安心」に繋がっていることが推察された。

フィンランドのユースセンターの特徴は、若者の支援ニーズに丁寧に寄り添う専門家やピアの存在であり、ユースセンターが若者の居場所や安心できる環境となっていることである。日本の若者支援においても、問題解決的(事後対応的)支援ではなく、地域での早期・予防的支援としての居場所づくりや支援内容の検討が課題である。

文献

- 1) 日本学術会議「若者支援政策の拡充に向けて」『学術の動向』第22巻8号, pp.123-124(2017年).
- 2) 高橋智, 田部絢子, 内藤千尋, 石川衣紀, 「『若者支援センター』の取り組み—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向②—」『内外教育』第6692号, 時事通信社, pp.12-15(2018年).
- 3) Helsinki Youth Centre,
<https://www.hel.fi/helsinki/en/administration/administration/resident/youth/youth-centres/>(閲覧日2020.09).
- 4) Harju Youth Centre HP
<http://harju.munstadi.fi/>(閲覧日2020.09).
- 5) Harju Youth Centre
<https://www.facebook.com/harju.nuorisotalo/>(閲覧日2020.09).
- 6) Vamos:
<https://www.hdl.fi/vamos/kaupungit/espoo/>(閲覧日2020.09).
- 7) Vamos, Tokion Gakugei yliopiston professoreita, tutkijoita ja opiskelijoita oli tutustumassa Vamos Espoossa2018- 4- 3
<https://www.hdl.fi/vamos/kaupungit/espoo/>
<https://www.instagram.com/p/BhG1KTHB974/>(閲覧日2018.04).